

## 大扶桑國考 下

平田篤胤撰述。天保七刊。

今の世にも、然る大木ありやと尋ぬるに、文化九年の事とか、紀伊ノ国熊野山の奥三十里ばかりにて、大木の榎を伐出せるに、元木百二十抱、高さ三百二十間餘り、南北へ差たる枝十九抱あり、元木の木口三十四間四尺八寸なるを、角にして廿五間ばかり有り、此ノ木の寄生木高さ七間半餘の杉七本、その外六七間以下の諸木多く、松、柎、楓、椎、柏、柿、竹、南天なども寄りとぞ、また熊野の山奥に、大杉明神と祀へる木は、三十尋餘り有りと云ふ、また陸奥ノ国の郡は知らず、関村と云ふ所にも、大杉明神として、三十三尋餘りの木ある由なるが、是等より大きな木の有りと云フことは、未タ聞かず、其は大地のなほ大に成り行く間は、木もそれにつれて大樹と成れるが、大地すでに成竟ては、大かた木の立延べき量の自然に定れりと見え、右の大杉など、神世の大樹に比ては小木なれど、今しも斯ばかりの木さへに、多くは聞えずぞ有りける、然れ

ど、飛弾ノ国高山の辺に異木ありて、枝も葉もみな三ツワカに爰  
れし樹なるが、其ノ蔭一里ばかりを蔽オホひて、今も立チ榮え有  
りと云へる人あり、また信濃ノ国戸隠山の奥深き所に、一本  
にして、二三里の間にはひ蟠ワダカマれる松ノ木あり、冬より春に  
至り、五丈餘も雪ふる所なる故に、厭オサれて直立すること能アタ  
はず、地につきて低ヒクければ、昔より其ノ幹木ミキを見し人なし  
と云フことも聞キたり、此等の大樹コレラどもの事、なほ其ノ国々の  
人に委タツく問シラねて、其ノ実否を知らまほしき事なり、

註 新日本古典籍総合データベースの「大扶桑國考」

大洲凶矢野, 364-116-1, 刊, 2冊,

100217393」 (DOI 10.20730/100217393) に画像

有り。74、75コマ目